

日本語 (7)



目次

詩

一 朝だ 元気で

二 木の根

三 詩を作ろう

「手」ということば

ブラジリア

一 新しい首都

二 新首都が造られるまで

日本の国

- 一 位置と地形
- 二 日本の風景
- 三 日本の歴史
- 四 福沢諭吉

方言と共通語

ブラジルへの移住

- 一 赤道祭
- 二 新しい生活
- 三 日系コロニア
- 四 水野 龍
- 五 中村長八

ひたいのきず

おそろしいへび

- 一 冬眠する動物
- 二 おそろしい毒へび
- 三 ビタルIIブラジル

敬語

銀の食器

秋山君の二るい打  
オリンピック大会  
辞書のひき方

交通の話

- 一 交通機関の進歩
- 二 ブラジルの交通  
ルイスIIガマ

おもなことば

今までに習ったかん字

新しいかん字

先生と父母へ

詩

一 朝だ 元気で

八十島(やそじま) 穂(みのる)

朝だ 朝だよ。朝日がのぼる。

空にまっかな 日がのぼる。

みんな元気で 元気で起きよ。

朝はこころも、からりと晴れる。

あなたもわたしも きみらもぼくも、

ひとり残らず、起きよ 朝だ。

朝だ 朝だよ。朝日がのぼる。

きょうも 歓喜の日のぼる。

みんな明るく 明るく起きよ。

朝はこころも からりと晴れる。

あなたもわたしも きみらもぼくも

ひとり残らず、起きよ 朝だ。

朝だ 朝だよ。朝日がのぼる。

町にいなかに 日がのぼる。

みんなそろって そろって起きよ。

朝はうれしい みどりの空だ。

あなたもわたしも きみらもぼくも

ひとり残らず、起きよ 朝だ。

(新漢字 詩 歓 喜)



二 木の根

アフオンソローペス  
デアアルメイダ

木の根は わたしたちに教える、

幸福とは どんなものであるかを。

つつましく 心ゆたかに、

しんぼう強く 地中に 身をうずめ、

木を養い 育てる養分を、

わき目もふらず さがし求める。

休むこともなく つかれもせず、

息づまるような地中で 働き続ける。

その ただ一つの喜びは

自分では 見られないけれども

えだに花を開かせ、緑の葉をしげらせ、

実を結ばせ、種を作らせるといったふうに……。

自分の働きが、

どんなに大切なものかを 知ることだ。

つつましく 心ゆたかに……。

それこそ 幸福というものだ。

(新漢字 幸福 養育 養求 息結)

### 三 詩を作ろう

日常 気をつけて自分の周囲を見よう。いろいろな新しいできごとが、次から次へと起こっている。それが、たとえ庭の草木のことであっても、空に流れる雲の様子であっても、心をとめてよく見れば同じことは二度と無い。心にはつと感じたり、しみじみと考えたりすることは、毎日たくさんあるはずだ。その感じたこと、考えたことを、ことばにして表わせば、それが詩である。

わたしたちは、見たこと、感じたことを、その時うかんたことばで書こう。考えたことを、その時考えたことばで書こう。

それが詩になるのだ。

詩には、定型詩と自由詩とがある。

定型詩というのは、決まった型にことばをはめこんで作る詩である。『朝だ元気で』は、一行一行の音数が、みな決まっているから定型詩である。

自由詩というのは、決まった型が無い。感じたり、考えたりしたことを、自分の書きたいように書けばよい。『木の根』は、一行一行の音数が決まっていないから、自由詩である。

詩をたくさん読もう。そして、うれしいこと、おもしろいことがあったら、それを詩に作ってみよう。

定型詩にしてもよい。

自由詩にしてもよい。

自分のすきな型で作ろう。

(新漢字 常 周 囲 無 定 型 決 型)

「手」ということは

「手」ということは、人体の手を表わしたものです。

「かた手」「両手」「手首」「手先」「手のひら」「手のこころ」な

どと使います。

また、「手」ということは人を表わすこともあります。

「売り手」「買い手」「相手」「乗り手」「聞き手」「歌い手」な

どです。

「シユ」と読んで、同じように人を表わすことばもあります。

「選手」「助手」「投手」「運転手」などがそれです。

それから、働く人のことを言う場合、「あそこには手が多い」

「手が足りなくて」まる「もっと手がほしい」などと、使ったり  
します。

やり方を表わすときに、一八方手をつくした「これ以上手が無

い」「手を交え品を交え」などと、言ったりします。

うでまえがよくなったことを、「手が上がった」と言います。



植物のつるをからませる竹や木のことも「手」と言います。

「きゅうりの手」「まめの子」「トマテの子」などです。

方向を示すとき、「上手」「下手」「右手」「左手」などとも使います。

品物が、自分の所有になったとき、「手にはいった」と言い、自分で作ることを、「手作り」「手製」などと言います。

はつきりしているとき、「手に取るように」という言い方もあります。

(新漢字 選 助 投 足 向 示 上 下 製

(008. japan)

苦心したり、取りあつかいに「まったとき」「手を焼いた」と使  
い、手だんが無い場合や非常に「まったとき」「手も足も出ない」  
と言います。

あぶない物事をはたから見聞きして ひやひやするとき「手に  
あせをいびくる」と言います。

「手を入れる」というのは、仕事の不足をおぎなうことです。  
「手がかかる」「手にあまる」「手を切る」「手を上げる」など  
多くのちがった意味にも使われます。

この外どんな使い方があるか調べてみましょう。

「目」「人」には、どんな使い方があるでしょう。

## ブラジリア

### 一 新しい首都

飛行機は雲から出て、明るい  
草原の上を飛んでいます。

「ほら、見えてきたよ。」

おとうさんの指さす方に、いく  
つもの白い建物が見えました。

「あつ、ブラジリア。」

はるおさんのむねは、わくわくしてきました。

去年、おじさんの一家がブラジルに引っ越しする時、はるえさん（新漢字 苦非原 家）

(009. j p 3)

んは、いとこのえい子さんに、来年の冬休みには、きっと遊びに行くこと約束してくれたのでした。こんど、おとうさんが北の方へ旅行することになりました。はるえさんは、おとうさんにねだってブラジルまで連れていってもらいました。

間もなく、飛行機は高度を下げながら、ブラジルの市がいを目がけて近づいていきました。やがて、飛行場がもり上がるように見えてきたかと思うと、すべるように着陸しました。

飛行場の待合室には、おじさんとえい子さんがむかえに来ていました。はるえさんとえい子さんは、かたをだき合って喜びました。

はるえさんのおじつやさんとおじつやさんは、「やあ、やあ。」と言いつつ、あく手をしました。

はるえさんたちは、すぐにおじさんの家に行きました。久しぶり

に会ったので、話はなかなかつきませんでした。

次の日、おじさんの案内で、はるえさんたちはブラジリアを見物しました。

ブラジリアは、ゴヤニヤ市から北東の方に、百二十キロメートルほどはなれた所にあります。リベイロン・バナナルビアショーフンドの間にあつて、面積は五千四百平方キロメートルといわれています。今、建設の真つ最中で、あちらこちらに建築中の大きな建物が、によきによき立っています。

ブラッサムニシバルからスポーツセンター、そして、テレビとうの建つ所を通つていくと、ご楽センターに出ます。ここが、市中心で、近くには銀行、会社がい、商店がいもあつて、いちばん

(新漢字 約 旅 下 着 案 内 積 建 設 築 楽 銀

(010. j p a s )

にぎやかな所です。また、このあたりから

左右に、住たくがいがのびていて、アパー

トが建ちならんでいます。

ご楽センターを過ぎて、文化センターを通っていくと、カテドラルノツサッセニヨララダアパレシータの前に出ます。



その先は、エスプラナーダドスミニステリオスで、回りには官庁・官舎があります。もつといくと、ブラツサードスリートレ

スルポデレスに着きます。ここには、二十五階の高い建物の前に、大きなおわんを、上向きと下向きにならべたような建物があります。

これは上院と下院で、ブラジルの政治の中心です。

さらに進むと湖の岸に出ます。湖はパ

ラノア川をせきとめて造ったものです。

この湖のほとりに、大統領官ていの、ア

ルボラーダ宮が

あります。

ブラジリアは、

ルシオ・コスタ

が設計したもの

で、プラノ・ピロットといわれます。

建物は、オスカル・ニーマイヤーが設計

しました。

(新漢字) 左右過官舎着階院政治岸造統領  
宮 計



プラノールピロットという設計は、これまでどこの国にも無かった新しいものです。建物も、それにふさわしい形の物ばかりで、初めてブラジリアを見た者は、だれでもびっくりします。

大平原のまん中に新しく首

都を造るといふ、ブラジルの

大たんなやり方に、おどろか

ない者はありません。

はるえさんは、まるでちが

った世界に来たような気持ち

で、美しい湖の岸を歩きました。

## 二 新首都が造られるまで

ブラジルの国民は、首都を国の中央部に移したいと考えていました。それは、ブラジルが独立する前からのことで、独立の後は、いく度かこの問題が国会で相談されました。

一千八百九十一年、しように来、首都を中央部に移すということが、

国会で決定されました。そして、一千九百二十二年、独立百年祭の時、新首都ブラジリアの位置が決まりました。

一千九百四十六年、新首都建設の問題が、国会に持ち出されました。こんどは、ブラジリアの区いきと面積が決められました。

一千九百五十六年、クビチェック大統領の時、ブラジリア建設の工事が始められ、一千九百六十年四月二十一日、ブラジルの首都は

### (新漢字 移題)

(012. iras)

リオ・デ・ジャネイロからブラジリアに移されました。

この新首都と各州とをつなぐために、ブラジリアを起点として五つの道路が造られています。

この首都を前進の足場として、未開発の地方が、どしどし発展す



ることでしょう。

ブラジルの国民が、百七十年も

前から持ち続けてきた願いが、い

よいよかなえられました。

新首都ブラジリアは、国民に大きな希望をあたえています。

## 日本の国

### 一 位置と地形

日本の地図を開いてよく

見ましよう。

日本は北東から南西へ、

ゆみ形に連なつた島国です。

いちばん大きな島が本州、

本州の北に北海道（ほっかいどう）、南西に

は四国と九州があります。



これらの四つの島と、その回りにある二千二百もの島を、日本列島といえます。

(新漢字 起 前進 未 開展 願 希望 位置 北 西 列 島)

(013. jpas )

日本列島の東には、太平洋をへだててアメリカがあり、西には日本海・東シナ海をへだててアジア大陸があります。

日本は山の多い国で、山地が八十パーセントをしめています。日

本アルプスとよばれるけわしい山々もあれば、いつもけむりをはいている火山もあります。

谷川の水は、きれいで、急流となつて海に注ぎます。

日本がけしきの美しい国といわれるのは、山や川が多いからです。

日本では、春夏秋冬と、季節の移り変わりがあります。

三・四・五月が春、六・七・八月が夏、九・十・十一月が秋、十二・一・二月が冬です。春のわか葉から夏の青葉に、そして秋のも

みじにと、自然はいろとりを変えます。冬になると、雪がふつて、

野山がまっ白になります。

日本の総面積は、三十七万平方キロメートルで、この小さな島国

に一億に近い人が住んでいます。

交通はよく発達していて、鉄道

や道路があみの目のように通って

います。

(新漢字 太洋山急流注季節自然総億達

(014. jpg 挿絵あり)

## 二 日本の風景

北海道(ほっかいどう)の東部に、阿寒(あかん)国立公園があ  
り

ます。雄(お)阿寒岳(たけ)のふもとにある、阿寒湖

の美しさ。湖の

底には、世界に

もめずらじい、

「まのこ」があ

ります。屈斜路(くつしゃろ)



湖・摩周（ましゅう）湖と、

それらを取りまく原始林、この雄大ななが

めは、北海道独特のものといえましょう。

青森県と秋田県にまたがる十和田八幡平（とわたはちまんたい）国立公園は、変化に富ん

だ十和田湖のけしきと、この湖から流れ出る奥入瀬（おいらせ）川の美しきと有

名です。またこの湖では ひめますの養しよくが行なわれています。

日光国立公園には、東照宮（とうしょうぐう）とうしよぐう（うしよぐう）があります。陽明門（ようめいもん）の美しきは、一日

中ながめていてもあきないのぞ、『日ぐう

し門』という名もあります。



日光陽明門

中禪寺（ちゅうぜんじ）湖から

流れ落ちる水は、高さ九十六メートルの、

華嚴（げごん）のたきとなつています。奥（おく）日光には、

湯の湖（こ）、尾瀬沼（おぜぬま）などがあります。

頭を雲の上に出し、四方の山を見おろし

て、かみなり様を下に聞く

富士は日本一の山。

（新漢字 風景湖 始林 県 富湯

（015. jpas）

富士山は、高さ三千七百七十六メートルで

す。富士箱根伊豆（はこねいず）国立公園は、富士山を中

心としたもので、湖と温泉（せん）と海岸線の美し  
さでよく知られています。

吉野（よしの）山は、日本

一の名所の名所

です。ふもとから

か月にわたってとき続けます。また富野は、

歴史の上でもよく知られています。吉野山

に連なつて、大峰山(おおみねさん)・大台(おおだい)が原(はら)山のなだら

山脈は、大和(やまと)アルプスといわれます。

そこをみなもととする熊野(くまの)川の上流と、この川が海に注ぐあたりの

熊野海岸、吉野熊野国立公園は、山と谷と海の美しさを合わせ持っている  
ています。

瀬戸内海(せとないかい)国立公園は、世界でもめずらしい、海の大公園です。

瀬戸内海は、中国・四国・九州に囲ま

れた内海で、海岸線の出入りがはげしく

大小三百余りの島が散在しています。

白いすなはま、緑のまつ、朝日・夕日を

浴びて、島々の間を行き来する白ほ、ま

るで絵のようです。

(新漢字 歴史連脈 囲余散在 浴

(016.jpg)

阿蘇(あそ) 国立公園は、九州の中央

大分(おおいた)・熊本(くまもと)の二県にまたがり、阿蘇火山と九重(くじゅう)火山とを合わせたものです。

阿蘇山

は、世界でいちばん大きな複式火山で、火口の中に広い平野があり、その中ほどにいくつも火山があつて、けむりをはいています。

九重火山群は、大船山(だいせんざん)・九重山などの火山が集まったもので、九州アルプスといわれています。



### 三 日本史

日本は、気候がよくてけしきの美しい土地です。この土地に、大陸や南洋から、多くの人がわたってきました。それは、ずっと大むかしのことです。

初めは、いくつかの小さな国に分かれていましたが、三世紀ごろ統一されて、大和朝廷（やまとちようてい）が日本を治めるようになりました。この朝廷

の中心は天皇家で、代々の天皇が国を治めました。第一代のお天皇は神武（む）天皇です。

日本の文化は、大陸と交通することによって進歩しました。古くは、米を作ること、養蚕・機織りなどが大陸から伝わりました。五世紀には、中国・朝鮮（ちようせん）から、じゆ教といっしょに、漢字が伝わり、

（新漢字 複群紀治皇神歩蚕機織伝漢）

日本人は、本を読み文字を書くようになりました。続いて六世紀には、インドに起こった仏教が、やはり中国・朝鮮を通って、日本にはいりました。仏教と共に、中国のすぐれた建築や工芸が伝わったので、日本の文化はめざましく進みました。

七世紀の初め、推古(すいこ)天皇のせつしよう

となった聖徳太子(しょうとくたいし)は、仏教や学問を広め、りっぱな寺を方々に建てました。

その中で、今も残っている法隆寺(ほうりゅうじ)は、世

界でいちばん古い木造の建物だといわれています。また太子は、日本で初めてのけん法や、その外、国を治めるための規則などを作りました。



法隆寺

中国や朝鮮との交通が、ますますさかんになって、りっぱな都が

必要になりました。八世紀の中ごろ、奈良(なら)に平城京(へいじょうきやう)というきれいな

都を作りました。この時代には、建築や工芸が進歩したばかりでなく、文学も進んで、古事記(こじき)・日本書紀(にほんしよき)・風

土記(ふどき)・方葉集(まんようしゆう)など、日本

の大切な本が書かれました。

八世紀の終わりに、都を京都に移し、これを平安京とよびました。後、東京に移るまで、およそ千百年の長い間、日本の都でした。

平安時代には、奈良時代に続いて、文化がいつそう開けました。かな文字が発明され、それを使ってたくさんの本が書かれました。

中でも紫式部(むらさきしきぶ)の書いた源氏物語(げんじもの)がたりは、世界に知られています。しかし

この、花のように美しく開いた文化は、身分の高い役人やぼうさん

(新漢字 文仏共芸造法外規則都必要)

などの間だけのもので、いっぱんの者は、むかしのままの生活をしていた。

都にいる身分の高い人たちが、ぜいたくに遊びくらしているうちに、地方はみだれてしまいました。このみだれた地方に、十世紀の中ごろから武家が起りました。天皇は、いちばん勢力の強い武家に、将軍（しょうぐん）という名をあたえ、日本を治めさせました。そこで武家は、

天皇の代理になろうとして、たがいに勢力を争いました。

武家政治の時代は、十一世紀から十九世紀の終わりごろまで続きました。武家の中でも、源（げん）氏・平（へい）氏・北条（ほうじょう）氏・足利（あしかが）氏・織田（おだ）氏・豊（とよ）臣（とみ）氏、徳川氏などは、将軍となって国を治めました。

この武家政治の時代には、文化の上であまり進歩が見られませんでした。十六世紀の中ごろ、西洋との交通が開け、ポルトガル人が初めて日本にきました。・かれらは、進

歩した西洋の学問や、めずらしい物と  
いつしよに、キリスト教を日本に伝え  
ました。十九世紀の終わりになって、

武家がほろび、約七百年ぶりに政治は天皇の手に帰り、新しい日本  
が生まれました。都も京都から東京に移されました。

新しい国家として立つて間もなく、清(しん)国と戦い、またロシア  
と戦

わなければなりませんでした。この二度の戦争で、日本の名は、世  
界中に知られました。その後、第一次世界大戦が起こり、日本は連  
合国側に立つて戦いました。第二次世界大戦の後、日本は、国民の  
治める国になりました。そして、世界の平和を守り、世界の文化を  
おし進める国として、発展しています。

(新漢字 武 勢 力 争 氏 戦 争 次 側)

#### 四 福沢諭吉 (ふくざわゆきち)

福沢諭吉は、一千八百二十五年、今

の大分 (おおいた) 県の武士の家に生まれた。

家がまずしかったので、十四、五才

になるまで、学問をすることができな

かった。しかし、かしこい上に、人一



倍の努力家だったので、二十才の時には、友だちを追いこすほどになつていた。

二十一才の時、長崎に行つて西洋の学問を学んだ。さらに大阪で勉強し、二十五才の時、今の東京に出た。

何度か外国に行つて、新しい知識を得た諭吉は、自分で学校を開いた。これが慶応義塾 (けいおうぎじゅく) 大学の始まりである。

そのころ、世界には、国力が強く文化の進んだ国がたくさんあつた。日本は、それらの国々の間にあつて、独立が守つていけるかど

うか、見きわめのつかないじょうたいであった。

論者が、最も心配したのは、どうすれば日本の独立を守ることが出来るか、ということであった。かれは、まず国民のひとりひとりが独立の人にならなければ、国の独立は守れないと考えた。

独立の人とは、自分の働きで自分のくらしをたて、正しいと信じ、これを行なう人のことである。かれは、そういう人々の間にこそ、真の自由と平等があり、そういう国民であつてこそ、国の独立が守れると言つた。

論者は、何事にも道理にかなつた考え方を重んじた。身分の高い

(新漢字 士 倍 努 知 知識 得 信 真 平)

(020. j. p. 2)

に  
低い、学問の有り無し、物を持つ持たぬというようなことで、人

差別をつけるのはまちがいであると言つた。

論者は、この考え方を、広く人々に知らせるため、多くの本を書

いた。中でも『学問のすすめ』は有名である。この本の書き出しには、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず。」と書いてある。このことばは、人間のとうとうと、自由と平等を、はつきりと述べたものである。

輸吉は、政府から役人になるよう、たびたびすすめられたが、どうしても役人にはならなかった。何の位も無い、ふ通の人民であることをほりとして、力の限り世のためにつくした。

こうして、一千九百二年、六十六才で多くの人におしまれながら世を去った。

### 方言と共通語

方言とは、その地方に限って、使われることばをいいます。

日本にもいろいろの方言があります。

先生　　チヨサグ、ソゴ　ヨメジヤ。

生徒　　ヘンヘ、ワ、ヨメネ。

先生　　ナスネ、ヨンデ　コネバ。



生徒 ヨンベラ、ドドト フトズネ ナワナタ。

これは、青森県、津軽（つがる）地方の会話です。何を話しているかわかり

ますか。共通語に直してみると、

先生 長作、そこを讀んでくらん。

生徒 先生、わたし、読めません。

（新漢字 低 有 差 述 位 限 世 言 直）

(021. jpg)

先生 どうして、讀んでこないのか。

生徒 ゆうべ、父といっしよに なわをなっていたのです。

ということなのです。では、これを九州の鹿児島（かごしま）地方のこ  
とばに直

したら、どうなるでしょう。

先生 チョウサツ、ソコヲヨンミレ。

生徒 センセ、オヤ、ヨンガナラン。

先生 ナイゴテヨ、ヨンコンジヤツタトヤ。

生徒 ユベ、オツチャントイッシヨキ ナワ ヌタ。  
となります。

青森の人と、鹿児島の人が話し合っても、たがいに何を言っているのかわからないでしょう。

東京地方で、「借りた」というのを、関西地方では、「借ッタ」と言い、「買った」と言うときには、「コータ」と言います。

落トシテシマッタ人モ、イルソーダ。ナクサナイヨーニ、  
ヨク気ヲ付ケロ。

と言うのは、東部地方の方言ですが、西部地方の方言にすると  
落トイテシモータ人モ、オルソーヤ。失ワンヨーニ、  
ヨー気イ付ケー。

と言うことになります。

大阪地方の「……さかい」、長崎地方の「……ばってん」  
などは、よく知られている方言です。

方言は、その地方の歴史や文化と、深いつながりを持っています。  
また、民ようなどに歌いこまれ、人々になつかしがられます。

方言で話し合っていると、気持ちがよく通じ、親しみがまします。

(新漢字 借西 失親)

(022. jpas)

しかし、他の地方の人と話し合うとき、方言では通じない場合があります。そこで、国中どこへ行っても通じる「ことば」が必要になります。それが共通語で、ひょうじゅん語ともいわれています。

わたしたちが勉強しているのは、この共通語なのです。

共通語は、東京ことばにいちばん近いものです。今では、日本中にこの共通語がいきわたっています。

ことばは、生きているものです。

新しい文化と共に生まれ、新しい時代の中で育っていきます。

わたしたちは、時代に合った、正しく美し

いことばを学んで、これを使うように心がけ

ましょう。

## ブラジルへの移住

### 一 赤道祭

南米航路の汽船 ぶらじるまるは、横浜（よこはま）を出てから二十五日目、大西洋を南へ南へと進んでいます。もうあと一週間で、

リオールデッジャネイロへ入港する予定です。

わたしは、朝早く起きて、中かんばんに出ました。もうすぐにこの船ともお別れだ、

とつぶやきながら、速い雲を見ていると、

横浜出港の日のことが思い出されました。

岸へきいっぱいの見送り人。美しいテープ

（新漢字 赤週港予別）

(023. 1123)

のみだれ。ばんざいのさげび声。まるでゆめのよらかな光景でした。

その日から、知らない人々にまじって、長い船の旅を続けてきました。横浜を出てから、広い太平洋をわたり、十五日目にサンニフランシスコに入港しました。いく日も空と海ばかりながめてきたので、陸がなつかしく、美しい港のけしきはわすれられません。

それから ロスⅡアンゼルスに寄港し、北アメリカの海岸にそって南へくだりました。パナマ運河を通って、バルボア、ラীগアイラに立ち寄り、大西洋に出てきたのです。

船に乗ったときは、さびしく思いましたが、みんなすぐになかよしになりました。おとなの人たちは、たがいにごきょうのことを話したり、ブラジルのことを語ったりして楽しそうでした。

わたしたちは、船内学校で勉強したり、かん板で遊んだりして、日のたつのをわすれておもしろく過ごしてきました。

わたしは、秋子さんとたいそう親しくなりました。船内であった運動会や学芸会にもいっしょに出ました。ブラジルに行ってもきつと手紙を書きましようねと、何べんも約束くしました。

「友子ちゃん、せんたくを手伝ってよ。」

ふり向くと、おかあさんがよんでいました。せんたくをすませ、朝食が終わってから、秋子さんと上かん板に上がりました。

きょうは、赤道祭なので、船客は上かん板に集まっていました。十時になると、いよいよ赤道祭が始まりました。

船が赤道を通過する時、むかしから、赤道祭が行なわれることになっていきます。これは、海の神様から、船長が赤道の門を開くかぎ（新漢字 寄河 寄朝 過 様）

(024. j p a s )

をもらうぎ式です。そして、神様と船長になる人は、船客の中から選ばれます。神様になったのは、春山さんとひろ子さんのねえさんで、船長さんには、和田のおじさんがなりました。

赤道祭が終わって昼食の後、かそう行列が始まりました。秋子さんも出るはずです。わたしは、急いで上かん板に上がりました。前の方に出てみると、ちようど行列が通っているところでした。

海の神様と船長さんを先頭に、かそうした人たちが続いてきます。

インド人、さむらい、花よめさん。ずいぶんとつぴなかさうもあつて、見物人は大よろこびです。

「まあ、きれいな花よめさん。あらあら、竹田洋次さんよ。」

わたしの後ろにいたねえさんが、大きな声で言いました。洋次さんがすました顔で歩いているのを見ると、わたしは急におかしくなりました。秋子さんは、フランス人形のすがたで、ピエロにかさうしたおとうさんと、手をつないで出てきました。わたしが手をふるると、秋子さんはすぐ見つけました。

「人形そっくり。とてもかわいいわ。」

「はずかしい。」

秋子さんは、にっこりして通り過ぎました。

強い日がかん板いっぱいに照っています。

かさうした人たちも、見物人も、みな楽

しそうです。

長さ百五十六メートル、はば二十メート

ル、一方百トンのぶらじるまるは、リオ＝

デジタルジャーネイロをさして進んでいるのです。

(選 昼 照)

(025. .jpg)

二 新しい生活

この村に入植して間もなく、友子さんのおとうさんは、

「友子、おまえは学校に行くんだよ。」

と言って、グループIIエスコラールに入学の手続きをしました。

友子さんは、日本では四年生でしたが、また一年生から始めるのかと思うと、少しはずかしい気がしました。でも、勉強はしたいので、思い切って入学しました。最初の日、友子さんがグループから帰ってくると、おかあさんが聞きました。

「友子、どうだった、学校は。」

「わたし、こまったわ。先生のおっしゃることがさっぱりわからな  
いんですもの。」

「そうでしょうね。でも、少しのしんぼいよ。」



「ええ、わたし、うんとがんばるわ。」

友子さんが、へやで服を着かえていると、おかあさんが、秋子さんからの手紙を持ってきました。

秋子さんの一家は、パラナ川の新開たく地に入植したのです。

ほねの祈れる開たくの様子が、くわしく書いてありました。うち中力を合わせ、元気で働いているということですよ。

秋子さんは、近くに学校も無いし、友だちもいないので、さびしくてたまらないと書いてありました。

友子さんの一家は、おじさんによび寄せてもらったのです。おじさんは、サンパウロ近くのこの村に、もう二十何年も住んでいます。果樹園を持ち、養けいと野菜さいばいをしています。おじさん

(026. japan)

は、新しい家を建てて友子さんたちをむかえてくれました。

友子さんのうちでは、たいへん張り切って、毎日朝早くから働いています。この間、おとうさんは、日曜日なのに畑に出ていました。

そこへ、おじさんが来て、わらいながら言いました。

「精出して働くのもいいが、日曜日は休む

ものだよ。」

「あ、そうだ。きょうは日曜日だったね。」

おとうさんは、働くのをやめて帰りました。

見る物聞くもの、みなめずらしく、失敗

も多くて、ずいぶんまじります。

おとうさんは、畑の仕事を、おじさんに

教えてもらっています。

おかあさんは、ブラジル料理を、おばさんに習っています。友子さんが、近所の店に行くときには、いとこのはるえさんがいつしよに行ってくれます。弟の時道ちゃんの友だちは、となりの、ペードロちゃんです。ふたりは、ちっともことばが通じないのに、なかよく遊んでいます。ゆうべ、おかあさんが友子さんに言いました。

「ありがたいねえ、みなさんから親切にしてください。わたしはブラジルに来たことを、本当によかったと思っていますよ。」

友子さんが、この村に来てからのことを思い出していると、サーラから、おとうさんやおじさんたちの声が、にぎやかに聞こえてきました。

友子さんは、サーラに行つて、みんなに秋子さんからの手紙を見せました。

(新漢字 張精 失敗親)

(027. ipas)

「新しい所へ行った人たちは、たいへんだなあ。しかしよくがんばっているね。」

おとうさんが、感心しました。

「新開たく地の生活は、むかしわたし

たちがやったのと同じだね。

無理をして、病気になるなければい

いが。」

それから、おじさんは、むかし苦労し



た話や、ブラジルの開たくにつくした人々の話をしました。

### 三 日糸コロニア

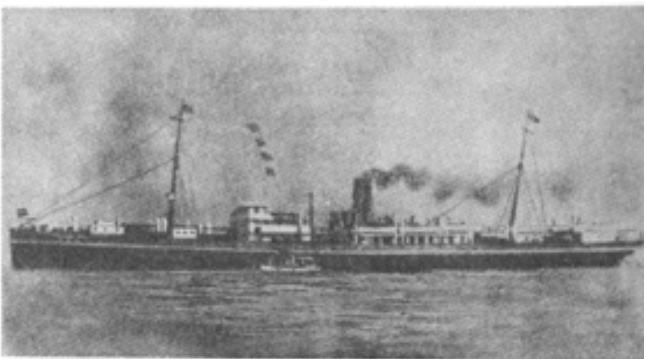
日本人が、移住者として初めてブラジルに来たのは、一千九百八年でした。

かさどまるに乗ってきた百五十八家族

七百八十一人が、六月十八日、サントスに上陸しました。それから後、次々と日本人が移住するようになったのです。

日本人が、ブラジルに移住するようになるまでには、日本とブラジルとの間にたびたび交しようが行なわれました。交しようがまとまって、最初の移住者を連

(新漢字 無 労 系)



かさどまる

れてきたのは、水野龍（みずのりゆう）という人でした。

初めのころ移住した人たちは、おもにブラジル人のコーヒー園で働きました。その後ブラジルに土地を買って、最初に移住地を作ったのは、青柳郁太郎（あおやなぎいくたろう）という人で、一千九百十二年、レジストロに移

住地を開きました。それから方々に移住地ができましたが、大きいのでは、アリアンサ・チエテ・バストス・トレス・バラスなどです。

移住地に入植した人たちは、自分の土地なので思うように仕事ができ、農業にはげみました。また一方には、サンパウロ州・マトーグロソ州・アマゾン地方などに、新しい土地を求めて、どんなはいつていった人たちもありました。おそろしいけものや、病気と戦いながら、原始林を切り開いて、耕地を作りました。

コーヒーや綿を植えました。米やとうもろこしも作りました。養蚕や、養けいなどもしました。また都会の近くに入植した人々は、野菜を作り、果樹を植えました。今日のように、ブラジルの農業が進

み、産物がゆたかになったのは、日本人の努力によるところが多いといわれています。

移住者が増加するにつれて、農業ばかりでなく、商業・工業その他、さまざまなしよく業にじゅう事する人も多くなりました。

今では、広大な農園・牧場を持っている人もいます。また大きな会社・商店・工場をけいえいしている人もいます。

ブラジルで生まれた子どもたちの中には、上級の学校を卒業して医者・技師・べんご士・芸術家・政治家などになっている者もいます。

### (新漢字 耕 ● 増加 広 牧 級 技 師 術)

(029. jpas)

このように、日系コロニアはさかえてきました。しかし、不運な目に合って、なくなった大ぜいの移住者もいるのです。

コーヒー園で働いた人たちと共に、移住地を作った平野連平(ひらのうんぺい)、多くの移住者の世話をした上塚周平(うえづかしゅう

へい)、日本で植民学校を作つて、多数の卒業生を南米に送り、後アマゾンに移住した崎山比佐衛(さきやまひさゑ)、日本語とブラジル語の辞書を作つた大武和三郎(おおたけわさざう)、その他コロニアのためにつくした人々のことを、わすれることはできません。

一千九百五十八年六月十八日は、第一回移住者がブラジルに上陸してから五十年目に当たるので、さかんなお祝いをしました。

半世紀前、遠い日本から来たのは、わずかな人でした。ちよつと小さな水の流れが、小川になり、大川になるように、日系コロニアも、今では四十万人をこえています。

#### 四 水野龍(みずのりゅう)

水野龍は、高知県に生まれました。

東京の学校で勉強をしました。

いつも、世の中のために役立つ仕事を

したいと思つていました。

ある日、水野龍は、ブラジルにいる杉

村公使から、日本政府に送られた報告書を読みました。それには、『ブラジルは住みよい所で、ブラジル政府も日本人の移住を望んでいる。』ということが書いてありました。以前から、日本人はどんどん海外に発展しなければならぬと、考えていたかれは、ブラジルこそ、日本人の行く所だと思いました。そこで、一千九百五年に、  
(新漢字 不 辞 書 使 報 告 望)

(030. jpg 挿絵あり)

ブラジルに来て、日本人が移住できるように、ブラジル政府と話し合いました。

話が決まったので、日本に帰り、植民会社を作って、移住希望者を集めました。このとき集まった人たちが、一千九百八年、水野龍(みずのりゆう)

といっしよに、かさどまるでブラジルに来ました。これが、第二回の移住者です。

かれは、これこそ神様からさずかった、とうとい仕事だと思いま



した。日本とブラジルとの間を、なんべんも往復して、移住者の世話をしました。またブラジルと日本との親善に力をつくしました。

こうして水野瀧は、愛するブラジルで、九十二才の生がいを終わりました。それは、一千九百五十二年のことでした。

## 五 中村長八（なかむらちようはち）

中村長八は、長崎（ながさき）で生まれました。

カトリックの神父で、一千九百二十三年、五十八才の時、ブラジルに来ました。

当時、日本人の多くは、移住地で開たくにじゅう事していました。あせまみれ



中村長八

になって働き、不自由な生活をしていました。

中村神父は、この人たちをなぐさめ、はげますことが、わたしのつとめだと思つて、ブラジルに来たのでした。

最初、ソロカバナ線のボツカツに住んでいましたが、後、アルバレスIIマツシヤードに移りました。

(新漢字 往復 善神父)

(031. jpg)

中村神父は、ブラジルに着くとすぐ、村から村へ日本人をたずねていきました。マットで夜明かしをしたり、おそろしいけものに出会ったり、ときにはあらしにあったりして、苦しい旅を続け、一年のうち三分の二は、ブラジル中を回って歩きました。カトリック教の話をして、人々をなぐさめ、はげしました。またいろいろなことごとまっている人や、迷っている人の相談相手になってやりました。こうして、しばらくすると、どこの町、どこの村でも、中村神父が回ってくるのを、楽しんで待つようになりました。

日本人ばかりでなく、ブラジル人たちも、『日本人のえらい神父様』といって、親しみ敬いました。

中村神父は、一千九百四十年、七十八才でなくなりました。

日本人もブラジル人も、その死をおしんでたいそう悲しみました。

ひたいのきず

人物 道子 新しく日本から来た生徒

あきら たけお のぼる

ローザ ジュリア いずみ

道子の同級生

場所 地方のある村

## 第一まく

学校の運動場で、あきら・たけお・のぼるの三人が、ボールをけって遊んでいる。道子・ジュリア・ローザ・いずみは、教室のまどの外に立って話をしている。

(新漢字 夜迷敬悲)

(032. j-p. 3)

あきら “柱のきずは おとしの” あっ、ちがった。

“ひたいのきずは おとしの”

五月五日の せいくらん

ローザ また歌ってる。およしなさいよく

たけおとのぼるが、あきらまといっしょに、大声で歌い出す。

「ひたいのきずは おとこの

五月五日の せいくらん

ちまき食べ食べ にいさんが

はかってくれた せいのだけ

道子は、うつむいて右手に去る。

ジュリア あなたたち、意地わるね。道子さんをからかって。

あきら かまうもんか。あいつ、いばってるんだから、ぼくらよ

り、少し日本語がうまいからって、なにさ……。

たけお うまいに決まってるよ。この間、日本から来たばかりだ

もの。

のぼる ブラジル語なら、ぼくらの方がうまいや。ブラジル語の

時間には、小さくなってるくせに、なんだい。

いずみ 道子さん、ちっともいばってなんかいないわ。ブラジル

に来たばかりなので、よくわからないから、だまっ  
てるのよ。

あきら　へん、君らだって、あまりなかよくしてないじゃないか。  
あきら・たけお・のぼるたちは、わいわい言いながら左手に去  
る。

道子が、右手から出てくる。

ローザ　道子さん、何してたの。

(033. .j p a)

道子　先生の所へ行ってきたのよ。

ジュリア　男の子のこと、言いつけに行ったの。

道子　いいえ、あした学校を休ませてもらいに行ったの。

いずみ　もう学校がいやになったの、からかわれるから。

道子　そんなことないわ。弟のひろしが病気なの。それで……。

ローザ　そう。道子さん、あんなにからかわれても、おこらない  
のね。

ジュリア　おこってやればいいのに。おこらないから、なお意地わ

るするのよ。

道子 わたしね。ひたいのきずのこと、からかわれてもなんともないのよ。

いずみ どうして。

道子 だって、このきずには、わけがあるのよ。

ローザ どんなわけなの。

道子 なんでもないのよ。弟が待ってるから、わたし、先に帰るわ。さようなら。

道子は、左手に去る。

ジュリア あのきず、やっぱりわけがあるのね。

いずみ 少々変ね。

ローザ でも、道子さん、日本語がじょうずね。わたしたち、なかよくして、教えてもらいましょうよ。

ジュリア そうね。わたしたちは、ブラジル語を教えてあげましょう。

ローザ わたし、うちが近いから、あした道子さんのうちに行っ

(034. jpas)

てみるわ。

ジュリア わたしも行く。

いずみ わたしも。

ローザ だけど、道子さんのきず、気味が悪いわね。

ジュリア 男の子たち、ジアボの顔っていつてるのよ。

ローザ、頭に両手を上げ、指で角のかっこうをして、

ローザ ジアボ、ジアボよ。ほうら、こわいよう。

ローザは、いずみとジュリアを追いかける。ふたりはわらいながらにげ

回る。 —まぐ—

## 第一まく

村の道。道の右側マット、左側カフェザール。マット側に、小さなカツペーラがあり、そばに木がある。



右手からローザが出てくる。左手からい

ずみとジュリアが出てくる。

ローザ おそいわね。わたし、道子さ

んのうちで待っていたのよ。

いずみ ごめんなさい。

ジュリア 道子さんは。

ローザ ひろさんのレイトを買いに

行って、るすだったわ。

いずみ ひろさんの病気はどうなの。

ローザ もうすぐ、おきられるそうよ。道子さんが、とてもよく

みてあげるんですって。

ジュリア えらいのね、道子さん。

(新漢字 魚)

(035. ー P 34)

ローザ もいとえらい話、おばさんか聞いてきたわ。



いずみ 道子さんのこと。

ローザ ええ、あのぎずのことよ。

ジュリア いずみ 聞かせてよ。

ローザ 日本にいたときね。ひろしさんとお使いに行く途中で、自動車にはねとばされたんですって。

ジュリア よそ見をしていたのかしら。

ローザ そうじゃないのよ。ひろしさんが、ひかれそうになったので、助けようとしてはねられたのよ。

いずみ ひろしさんは、どうだったの。

ローザ ひろしさんは、なんともなかったけど、道子さんが大けがをしたんですって。

ジュリア そのとき、ひたいにきずができたのね。

いずみ まあ、えらいのね、道子さん。

ローザ わたしたち、すまないわ。きのうジァボだなんて言って。

ジュリア わたし、こんど道子さんに会ったらあやまるわ。

いずみ わたし、これから道子さんとなかよくする。

ローザはあせをふこうとして、ハンカチをさがす。

ローザ あら、道子さんのうちに、ハンカチをわすれてきた。

ちよつと取りに行つてくるわ。

ジュリア わたしも、いつしよに行くわ。

いずみ わたしも。

三人は右手にはいる。左手から道子があせをふきまき出てくる。手に牛にゆ

うびんを入れたふくろを下げている。カップペーラの前を通り過ぎようとして

(036. j p a g)

立ち止まり、その前にひざまずいておがむ。そのとき、あきら・たけお・の

ぼるが左手から出てくる。道子はカップペーラのそばの木の後ろにかくれる。

たけお 何かおもしろいことはないかなあ。

のぼる つりに行かうか。

あきら それより、おに退治をしようよ。

たけお おに退治。

のぼる おになんか、いないじゃないか。

あきら いるんだよ。

あきらは、カッペーラの方を指さして、ふたりにききやう。

たけお へえ、道子が……。よし、おに退治だ。行こう。

のぼる ジアボの道子か、おもしろいおもしろい。

三人は、道子のかくれている木を囲む。道子が、木の後ろから出て来る。

あきら そら、おにがいた。

三人は、手をたたいて はやしたてる。

“ hitai no kizu wa ototoshi no

gomori no sei kurabu ”

道子 そこどいて。わたし、帰るんだから……………。

あきら 神様に、何たのんだんだ。

たけお ぼくらに、ばちを当ててくださいってたのんだのか。

道子 いいえ。弟の病気が早くなおるようにな、お願いしたのよ。

のぼる うそをつけ。

三人は、道子の帰り道に立ってじやまをする。そこへ、ローザ・ジュリア・

いずみが、右手から出て来る。

ローザ あつ、道子さんよ。

(新漢字 退)

(037. j pag)

ローザたちは、道子のそばにかけ寄る。

ローザ また、道子さんをいじめてるのね。

あきらら へん、やかましいや。

ジュリア 道子の手をとって道子さん、ごめんなさい。

ローザ いずみ ごめんなさいね。

道子 どうしたの。どうしてあやまるの。

いずみ わたしたち、道子さんの顔のこと、かげ口を言ったりした

のよ。

道子 いいのよ。そんなこと。

ローザ わたし、さつき道子さんのうちへ行っただです。そして  
おばさんから、きずのこと、みんな聞いたのよ。えらい  
わ、道子さん。

ジュリア 男の子たちに向かって 道子さんのひたいのきずはね、名  
よのきずよ。

いずみ 弟を助けたときにできたきずなのよ。

ローザ あなたたちも、あやまりなさい。女の子をいじめたりす  
るの、男らしくないことよ。

たけお 弟を助けたんだって。

ローザ そうよ、自動車にひかれそうになったひろしさんを助  
けようとして、けがしたのよ。

のぼる そうだったのか。

ジュリア 人の顔のことなんか、わらったりするの、いけないと思  
うわ。

ローザ そうよ。人は、顔なんかより心が大切よ。

あきら ぼくたち、悪かった。

たけお のぼる ごめんね、道子さん。

三人は、道子の前に、ならんで頭を下げる。

道子 いいのよ、あやまらなくて。

ローザ これからは、みんななかよくしましょうね。

あきら ぼくたち、道子さんを、送っているんですよ。

たけお のぼる うん、行こう。

ジュリア わたしたちも行くわ。

ローザは道子のふくろを持ってやる。

道子 みなさん、ありがとう。

のぼる さあ、行こう。

みんなは、歌を歌いながら右手に去る。

—まぐ—

おそろしいへび

1 冬眠（みん）する動物

ぼくは、青山君と西田先生のうちへ行きました。

「先生、今日は。」

「おお、よく来たね。さあ、おはいり。」

応接間にはいつて、こしをかけると、すぐ青山君が言いました。

「先生、ぼくたち、来ると中で、へびがかえるのをのむのを見ました。」

「ほう。かえるは、へびにねらわれたらおしまいだ。しかし、冬になると、へびもかえるも見られなくなるよ。」

「どうしてですか。」

（新漢字 冬 今 応 接

(039. j. a. o 横書き)

「それはね、どちらも、冬眠（みん）するからだよ。」

「冬眠というのは何ですか。」

先生は、冬眠のことや、その外、理科の話の話を聞かせてくださいまし

た。

へびやかえるのなか間は、ふつうの鳥やけものと同じがったところがある。

たいていの動物は、体温が決まっている。ところがへびやかえるのなか間は、気温が変わると、体温も変わる。気温が高くなると、体温も高くなり、活発に動き回る。気温が下がると、体温も低くなり、動けなくなってしまう。そこで、寒い季節には、土の中にもぐって、何も食べず、まるでねむったようにじっとしている。これを冬眠（みん）という。



かえる



いもり



どかげ



カメレオン

ふつうの動物の中にも、くまやこぎもりなどの

ように、冬眠するものが少しはいるが、ほんとう

に冬眠するのは、両生類とは虫類である。



両生類というのは、かえる・いもりなどで、は虫類というのは、へび・とかげ・わに・カメレオンなどである。

両生類は、初め、水中にすんでいるとき、えらで「きゅうし」、後には、肺(はい)で「きゅうし」、四本足で陸を歩き回る。

は虫類は、たいてい、たまごからかえったときの形で成長し、肺で「きゅうし」する。

(040. j p s 横書き)

水中にすむのもいるが、多くは陸にすんでいる。

「先生、カメレオンはブラジルにいますか。」

「ああ、北の方には、いるよ。カメレオンは、からだの色を自由に  
変えて、回りの物と同じにするそつだ。」

「おもしろい動物ですね。」

「それに、目が大きく頭がとがっていて、みょうな動物だよ。」

西田先生は、となりのへやから、動物図かんを持って来て、カメラオンの写真を見せてくださいました。

## 2 おそろしい毒へび

ブラジルは、大部分が熱たいにぞくし、まだ開けない土地が多いので、は虫類がたくさんすんでいます。

は虫類のうち、へびは、およそ二百種といわれていますが、そのうち三十種ほどは、毒へびです。

毒へびは、林の中や草原、または、じめじめした土地にすんでいます。昼間はたいてい暗い所にかくれていますが、夜になると、食物をさがしに出てきます。毒へびは、人が近づいてもさわらなければ、飛びついてはきません。夜道や草むらの中などを歩いているとき、うっかり、さわったりふみつけたりするとかまれます。

毒へびにかまれた場合には、すぐに注射（しや）をしなければなりません。

かまれてから、そのままにしておくど、取り返しのつかないことになります。不便な土地に住んでいて、手近に注射(しや)薬が無かつたため

に、命を失つた者も少なくありませんでした。

そこで、原始林や草原に入植する人たちは、必ず、注射薬を持つて

いったものです。

ブタントン研究所では、この注射薬を、毒へびの齒から毒を取つて作っています。

ブラジルにすむ、おもな毒へびは、カスカベル・ジヤララカジヤラクスー・スルククー・ウルツーなどです。中でも、カスカベルは、すずへびともよばれ、最も強い毒を持ったへびです。

また、コラルという、赤と黒のだんだらもよつのあるへびがいます。

これには、毒を持っているのと、持っていないのがあります。

毒を持っている方は、目が小さくて、おが太いの

で見分けることができます。

毒を持たないへびには、大小いろいろあります  
が、大きいのは、ジボイアとスクリーです。ジボ  
イアの大きいのは、体長5メートルぐらいもあり、  
マットの中にすんでいて、よく木にのぼります。  
スクリーは、体長10メートル以上にもなります。  
川のそばにすんでいて、魚や動物を食べます。

毒を持たないへびの中に、ムスラナというのが  
います。このへびは、人や家ちくには害をしませ  
んが、毒へびを取って食べます。おそろしい毒へ  
びも、このムスラナにはかきません。

(新漢字 薬 必 齒)

(042. j p a s 横書き)

### 3 ビタルⅡブラジル

ジョアキンⅡフランシスコⅡビタルⅡ



ブラジルは、ミナスⅡゼライス州南部の、カン

パーニアという所で、1865年に、生まれました。

家が貧しいので、印刷所にやとわれたり、家

庭教師をしたり、鉄道工事場で働いたりして、学業を続けました。

そして、1891年に、リオージェジャネイロの医科大学を卒業しました。

そのころ、開たく地では、毒へびにかまれて死ぬ人がたくさんありましたまた各地に、チフス・ペストなどの伝せん病が流行していました。

ビタルブラジルは、これらの人々を救う方法は無いだろうかと考え、自分で研究しようと思決心しました。

かれは1897年、サンパウロに、ブタンタン研究所を作り、への毒の血清薬と、ペスト・チフスの予防薬の研究に着手しました。かれは、夜もろくにねないで、研究と実けんを重ね、ついに血清薬を作りあげました。

そのころ、リオージェジャネイロで、世界各国の医学者の会が開かれました。ビタルブラジルは、自分が完成した血清薬の話をしました。話が終わると、すぐ、外国のある医学者が言いました。

「この薬が、本当にきくかどうか、実けんを見なければ信じられない。」  
「では、実けんをお目にかけてみましょう。」

(新漢字 印刷 庭 各 伝 救 血 防 完 薬

(043. jpg 右 pg 横書き)

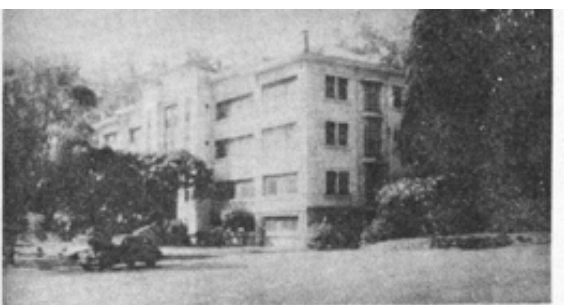
ビタルIIブラジルは、すぐその席で、はとを使って、実けんして見せました。各国の医学者は、血清薬のすばらしいききまめにおどろきかれの発明をほめたたえました。

ビタルIIブラジルは、ブタンタン研究所の外、ニテロイにも、ビタルIIブラジル研究所を作りました。そして、毒へび・毒ぐも・さそりの血清薬の外、ペスト・チフスなどの予防薬も発明して、世界に名を知られました。

ビタルIIブラジルは、医学

の上に多くの功績を残し、

1950年、85才でなくなり  
ました。



ブタンタン研究所

## 敬語

敬語には、次の三とおりがあります。

1 相手を敬って言うときは

「ご○○○○様」とか、「あなた」「ただあなた」「ご○○○○さん

ばを使います。

2 自分が、けんそんして言うときは

「申す」とか、「まいる」というようなことばを使います。

3 ていねいな気持ちを表わすものには

「ご○○○○いたします」「な○○○○ます」の、「ます」があります。

敬語というのは、相手を敬い、同時に自分がけんそんする気持ち

(新漢字 功績敬申回)

(044. jrbw)

を、ことばに表わしたものです。

敬語の使い方で、話し手と聞き手が、どういう関係にあるかがわかります。敬語は、相手により、場合によって、適当な使い方をしなければなりません。

「わたしは、買い物にいらっしやいます。」とか、「わたしは、お帰りになります。」とか、言うのはまちがいです。

「わたしは、買い物に行きます。」「わたしは、帰ります。」「が、正しいのです。」

「ごほうび」 「お」を付ける言い方があります。これには

「お茶」「おかし」「お客」などのように、付きやすいものがあり

ますが、付きにくいものには、「町」「村」「川」「電気」などがあります。外国から、日本にはいったことば、たとえば、

「ガラス」「ラジオ」「シネマ」などには、「お」を付けません。

日常会話の中のことばや、書きのことばに、やたらに「お」をつける人がありますが、付け過ぎないようにしたいものです。

「わたしは、おうちへ帰ってお勉強して、それから、お八つを食へて、おせんたくやおそごいをして、お手伝いをしました。」



これなどには、取ってよい「お」がたくさんあります。

相手側のものには、「お」や「ご」を付けますが、自分の例のものには付けません。たとえば

わたしは、自分のかいた絵を見て、それから次のへやに行きました。

先生は、<sup>ご</sup>自分がおかきになった絵を、<sup>ご</sup>らんになってから、次のへやに行かれました。

### (新漢字 適)

(045. j d a g)

のように使います。

目上の人に敬語を使う場合には、次のようにします。

自分が、直接目上の人と話す場合には、当然敬語を使います。

しかし、人から父のことをたずねられたような場合、父は、自分より目上であつても、人に対しては、自分と同じ側になるので、敬語を使いません。

「おとうさんは、もう、お出かけになりましたか。」

と、たずねられた場合には、

「はい、父は出かけました。」と答えます。

「はい、おとうさんはお出かけになりました。」と言つのは、まちがいです。

ていねいな言い方には、次のようなものがあります。

人形をいただく。 || 人形をもらう。

先生がおっしゃる。 || 先生が言う。

本をかしてあげる。 || 本をかしてやる。

お仕事をなさる。 || 仕事をする。

もうおやすみになりましたか。 || もうねましたか。

せんたくをしてくださる。 || せんたくをしてくれる。

テレビをごらんになる。 || テレビを見る。

おかあさんが、お花をお買いになる。 || おかあさんが、花を買う。

新しい着物をおめしになる。 || 新しい着物を着る。

銀の食器

雪のふりそうな寒い夕方であった。南フランスのあるいなか町を、みすばらしい身なりをした大きな男が、わずかな荷物のはいつたふくろをかつぎ、つかれた足を引きずりながら歩いていた。

男は、とある家の前に立ち止まって戸をたたいた。

戸があいて、女の人が顔を出した。

「旅の者です。ひとばんとめてください。」

「何か、書類をお持ちかね。」

男の差し出した書類には、こう書いてあった。

||名はジャン||バルジャン。

十九年間、ろう屋にいた男||

女の方は、ぴしやりと戸をしめた。



「早くあっちへおいで。行かないと、おまわりさんをお呼びよ。」

男は、すすりすすりと戸口から立ち去った。どの家に行ってたのんでも、

書類を見せると、野ら犬のように、追いはらわれてしまうのであった。男は、広場の石だたみの上にすわってじっと考えこんだ。

―世間の人はみな、あたたかい夕飯を食べて、火にあたりながら楽しく語り合っているだろう。おれひとりだけか、すきはらをかかえて、冷たい石だたみの上でねなければならぬ。このおれが、いったいどれほどの悪いことをしたというのだ。

―それは、夕方だった。おれは、ふとパン屋の店先で立ち止まった。

店には、ちょうど焼きたてのパンがならべてあった。

### (新漢字 飯 冷)

(047. j. pan)

一度でいい、こんなパンを食べてみたい。そう思っただけなのだ。だが、はっと気がついた時、おれの右手が、いつの間にかパンをにぎっていた。そして左手は、パン屋の主人につかまっていたのだ。たったそれだけのことで、ろう屋に五年。おれはがまんできなかつた。おれは四回もろう屋からにげ出した。つ

かまるたびに罪は重くなつて、とうとう十九年もろう屋に入れられた。やっと出てきたが、世間の人は冷たい目でおれを見る。ただのひとぼんでさえとめてくれない。

男の目から、くやしなみだが流れ落ちた。世間の人にくらしくてたまらなかつた。

「もしもし、旅のお方、あの家へ行つてごらんなさい。」

さつきから、男の様子を見ていた、ひとりの女が近づいてきて、広場の向こうの家を指さした。男は、ゆっくりと立ち上がり、その家へ行つて、戸をおしてみた。すると、戸はすうつとあいて、へやの中が見えた。ストーブの前に、年よりの男女がこしをかけ、そばには女中らしいわかい女の人立っていた。

「何か、ご用ですか。」

「おれは、はらがへつてゐるんだ。なんでもいいから食わせてくれ。そして、ひとぼんとめてもらいたいんだ。」

「まあ、おはいりなさい。」

「ちよつとまった。おれは、ジャン＝バルジャンだ。ろう屋から出

てきたばかりの男だぞ。」

「マグロアールや、夕飯をもうひとり分、用意しなさい。」

老人は、わかい女の人に言い付けた。男は、老人は耳が遠くて聞こ

(新漢字 罪老)

(048 . jpg)

えなかったのだと思った。

「いいか、おれは、十九年もろう屋にいた男だ。それでもとめてく

れるというのか。」

「マグロアールや、お客さんのしん台を用意しなさい。」

老人は、女中にそう言うつてから、男の方へ顔を向けた。

「そあそあ、はいつて火におあたり。すぐに夕飯の用意ができます

から。」

男は、老人のことばを聞いて、ゆめではないかと思った。

「あなたは、どういうお方ですか。」

「神様に、お仕えしている者です。わたしと妹と、女中の三人家族

です。どうぞぐつろいでください。」

「あなたはいい人だ。ありがとう。」

「あなたは、さつき自分の名を言いましたね。しかし、わたしは名を知る必要はないのです。わたしは、あなたのもう一つの名を知っているからです。」

「もう一つの名ですって。」

「そうです。あなたのもう一つの名は、”わたしの兄弟”という名です。」

「ああ、神父さん。」

男は、感げきのあまり、老人の前にひざまずいた。

「と、あ、夕飯にしましょう。」

老人は、男の子を取って、食たくに着かせた。食たくには、美しい銀の食器がならべてあり、火をともした銀のろうそく立てが置いてあった。男は、む中になって食べた。

夜中を過ぎて、男はふと目をさました。家の中はしんと静まっていた。男は、ゆうべのことを思い出した。

―親切な神父さん。おいしかった夕奴。そして、あの食器。

あれは、きつとねだんの高い物にちがいない。―

男の心に、食器をぬすもつという気持ちがあ、むらむらと起こった。

―あの神父さんは特別だ。世間には親切な人などひとりたっているものか。これから後、金が無いと、

生きていけない。あの食器を金にかえ

てやろう。そうだ、今のうちに。―

男は起き出して、銀の食器をぬすみ、こっそりとにげ出した。



そして、となりの町へ向かって、夜道を走り去った。

○ ○

夜が明けた。老人は庭を散歩していた。



そこへ、女中があわててとんできました。

「たいへんです。銀の食器がぬすまれました。ぬすんだのはゆう

べとまった、あの男です。早くけい察へ。」

「待ちなさい。おまわりさんをよばなくて

もいいのだよ。」

老人は、かけ出そうとする女中を引き止めた。

そこへ、三人の兵隊が、銀の食器を持つ

た男を引き立ててきた。

(新漢字 静 察 兵)

(050. jpg 挿絵あり)

男は、ジャンバルジャンであった。

老人は、男のかたに手をかけた。

「これはまたどうしたとどうのですか。わ

たしは、ゆうべ、銀のさくしん立てもあ



げたのに、なぜ、食器しか持っていないか  
かったのです。」

兵隊たちは、顔を見合わせてかたをすくめた。

「神父さん、この食器は、おやりになったのですか。」

「そうですとも、わたしが差し上げたのです。」

「この男は、わたしたちを見ると、にげようと思いました。つかまえ  
てみると、銀の食器を持っていました。調べたら、神父さんの家  
の物だということがわかりました。きっと、ぬすんだのにちが  
いと思つて連れてきたのです。」

「いえいえ、この人は、ぬすみをするような人ではありません。」

兵隊たちは、男のなわをとき、老人にあいさつをして帰っていった。

老人は、家の中から、銀のろうそく立てを持ってきて、食器とい  
つしよに、男の子に持たせてやった。

「さあ、これもあなたのものです。持って

いきなさい。」

頭を低く下げたまま、ものも言えないでい

る男の目から、なみだがこぼれ落ちた。

男は、これからは、きつと正しい人間になろうと、心の中でちかかった。

(051. j. 2. 29)

### 秋山君の二るい打

空は朝から青々と晴れていた。

A移住地の野球場では、時々わあつと応援の声がわき上がっていた。全ブラジル少年野球大会を間近にひかえて、N地方の予選大会が行なわれているのである。

A移住地の少年チームは、一回に一点、二回に一点を入れて相手の移住地の少年チームを、六回までとく点無しにおさえてきた。ところが、七回の表で、その二点を取り返され、同点に追いこまれてしまった。

七回のうら、Aチーム最後のこうげきとなった。最初に出たバッター竹村が、ショートの前でしヒットで一塁に出た。

ここで一点、その一点で勝負が決まるのだ。N地方代表になれるのだ。Aチームの選手たちの心は急に明るくなった。

八番バッターでピッチャーの秋山が、バッターボックスにはいるとした。そのとき、かれは、森田さんによばれてベンチまで引き返した。森田さんは、A移住地青年チームのキャプテンで、少年チームのかんとくである。

「秋山、バントで竹村を一塁へ送ってくれ。岸に打たせて、どうしても一点かせがなければならぬからな。」

森田さんがそう言うのも無理ではない。きょうの秋山は、バッターとして、あまりいい成績ではなかった。しかし、元来弱いバッターではない。調子が出れば、大ものをつかっ飛ばす方だった。

「打たせてください。こんどは、打てそうな気がするんです。」

(新漢字 勝負元調)

「だめだ。ノー・ダンなんだから、ここはやはりバントだ。

わかったな。」

「はあ。」

秋山は、あいまいな返事をして出ていった。

かれは、すなおな少年だが、この命令にだけはしたがいにくい気持ちだった。どうも、ヒットが打てそうな気がしてならない。バントのぎせい打で、アウトになるのは残念で仕方がなかった。だが、かんとくの命令にそむくことはできない。秋山は、チームの作戦どおり、バントのつもりでバッターボックスにはいった。

Iチームのピッチャーは、キャッチャーの出すサインにうなずいてプレートをふんだ。ランナーの竹村は、じりじりといをはなれていく。「あつ、出過ぎた……」。と思った時、ピッチャーは、一るいへ役球した。あぶない。竹村は、すなけむりを上げて、一るいへすべりこむ。一るいしんは、手のひらを下にして、両手をひろげた。「セーフ。」あぶないところで助かった。一るいのコーチャーが、竹村に何か言っている。

秋山は、カーンと一発、打ちたくてたまらなくなってきた。

ー打てる。きつと打てる。ヒットを打てば、無理にバントをしなくてもいい。ー

その時、ピッチャーが第一球を投げた。秋山は、すかさず、バットを大きくふった。カーン。ボールはぐんぐんのびて、ライトとセンターとの間をぬくヒットになった。センターが、ころがっていくボールを追って、やっとつかんだ。ランナー竹村は、二るいから三るいへ。チャンス、チャンス。Aチームの応えん団は、総立ちになっ

(新漢字 命令 残 団)

(053. j p a g)

て、わあっと声をあげた。

ボールがピッチャーに帰った時、秋山は二るいに立っていた。竹村はホームイン。秋山の打った

次のバッター岸のバントで

二るい打が、Aチームを勝利にみちびいたのである。

こうして、AチームはN地方の代表として、全ブラジル大会への出場が決定した。

○ ○ ○ ○ ○

Aチームの選手たちは、あくる日も練習のため野球場に集まっていた。しばらくすると、かんとくの森田さんが来た。みんなは、かけ寄ってあいさつをした。森田さんはみんなの顔を見てから言った。「練習を始める前に、きょうは、少し話があるんだ。こっちへ来てくれないか。」

森田さんは、大きなパイネイラのこかげに行った。

選手たちは、森田さんを囲むようにして、集まった。

「みんな、きのうはよくやった。全ブラジル大会に、出場できることほうれしい。」

ところでぼくは、みんながよく戦ったことを、大いにほめたいのだが、それができないのだ。」

選手たちは、はっとした。森田さんが、何か重大なことを言おうとしているのが、だれにも感じられた。

「ぼくが、かんとくになった時、君たちに言ったことを覚えているだろう。チームの規則をよく守ること。試合のときは、かんとくの命令どおりにすること。それにさん成したので、ぼくはかんとくを引き受けたのだ。そして、きのうまで、気持ちよく練習や、

(新漢字 出練習 重覚 試)

(054. j.p. 3)

試合をしてきた。そのため、かなりの力がついてきたと思っている。だが、きのう、非常におもしろくないことがあった。」

ここまで聞いた時、秋山は、これは自分のことかな、しかし、しかられるわけではないと思った。

―あのとぎ、バントを命じられたのに、ぼくは打った。だが、

あのヒットで、ぼくらのチームは勝てたのだ。―

森田さんは、じつと秋山君の顔を見つめた。

「それは、きのう打った秋山君のヒットのことなのだ。バントで竹村君を二塁へ送る。これがぼくの作戦だった。秋山君もそれを



承知した。それなのに、勝手に打って出た。それは、かんとくと  
の約そくをやぶったことになり、チームワークをみだしたことに  
なるのだ。」

この時、竹村が顔を上げて言った。

「だけど、秋山君のヒットで勝ったんですから。」

「そうだ。勝つことは勝った。しかし、野球はただ勝ちさえすれば  
いい、というものではない。何よりも、チームワークというこ  
とが大切なのだ。ぼくたちが野球をするのは、それを身につける  
ためなのだ。」

選手たちは、じっと聞いていた。

「秋山君はいいピッチャーだ。だが、チームワークをみだしたこ  
とはよくない。次の試合に、出場を止められても仕方のないこと  
ろだ。」

秋山は、くちびるをかんでうつむいていた。

―森田さんのことばは、一つ一つもつともだ。自分は、少しい

い気になっていたのだ。

秋山は、なみだで光る目をあげて、前に進み出た。

「すみません。ぼく、悪かったと思います。」

ぼうしを取って、おじぎをした。足もとに、はらはらとなみだがこぼれた。選手たちの中には、くすんと鼻をならしながら、秋山といっしょにおじぎをする者もあった。

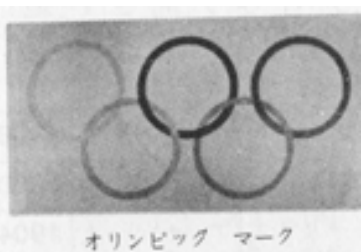
「わかってくれたか。よかった。全ブラジル大会も間近だ。みんながんばろう。さあ、練習だ。」

森田さんは、明るい声で、こう言ってかた手を上げた。

選手たちは、午後の太陽がかんかん照っている野球場に、元氣よく出ていった。

## オリンピック大会

オリンピックは、紀元前七百七十六年、ギリシア



に始まったスポーツの祭典です。これは、神々を祭  
つて、世の中の平和を祝うため、運動・詩・音楽な  
どの競技を行なったものです。

この大会は、四年目ごとに開かれて、約一千二百  
年も続きましたが、次第にふるわなくなり、紀元三百九十三年、取  
りやめになりました。

ところが、十九世紀の末、フランス人、ピエール・ド・クーベル  
タンは、世界の国々の人が集まって、スポーツ大会を行なえば、人  
類の平和に役立つと考えました。そこで、かれの首唱でふたたびオ

(新漢字 鼻陽典競次末唱)

(056. jpas)

リンピックを始めることに、力をつくしました。この努力が実を結  
び、一千八百九十六年、ギリシアのアテネで、第一回国際オリンピ  
ック大会が行なわれ、十三か国の選手が参加しました。

この大会は、その後も、四年目ごとに開かれてきていますが、そ

のたびに、参加する国がふえますますますかんになっています。

第七回、アントワープ大会の時、初めてかかげられた、オリンピックの旗は、クーベルタンが考え出したものだそうです。

白地に、向かって左から青・黄・黒・緑・赤の五色の輪が、W字形に組み合わせられています。これは、アジア・アフリカ・アメリカ・ヨーロッパ・オセアニアの五大州を、表わしたものだといわれています。

ブラジルが、初めてオリンピック大会に参加したのは、一千九百三十二年、第十回ロスアンゼルス大会です。日本が、参加するようになったのは、一千九百十二年、第五回ストックホルム大会からです。

むかし、オリンピック大会が、ギリシアで始まったころの、競技種目は、ほんのわずかでしたが、回を重ねるたびにふえてきました。

(新漢字 際 参 旗 輪 目)

一千九百六十年に行なわれた、第十七回ローマ大会のときは、十  
七種目もの競技が行なわれ、八十五か国、七千八百人の選手が参加  
しました。

スポーツは楽しいものです。

からだをじょうぶにすることができればかりでなく、心をきたえ  
てりっぱな人をつくります。

スポーツでつちかわれる心とからだによってこそ、オリンピック  
の旗が示すような、世界平和をまねくことができるでしょう。

### 辞書のひき方

文章の中に、読めない漢字があつたり、意味のわからないことば  
があつたりしたとき、すぐ教えてくれる人がいない場合には、どう  
したらよいでしょう。そのときは、辞書をひきます。

辞書が、漢字の読み方や、ことばの意味を教えてくれます。いち  
いち辞書をひいて調べるのは、めんどうなようですが、少し努力す

ればすぐなれるものです。辞書が使いこなせるようになれば、どんなに便利かわかりません。

ふつうに使われる辞書には、漢和辞典と、国語辞典があります。漢和辞典は、漢字の読み方や、意味がわからない場合に使われます。国語辞典は、ことばの意味や、使い方がわからなかったり、そのこ

### (新漢字 章)

(058. j p a g)

とばを表わす漢字がわからなかったりする場合に使われます。

漢和辞典をひくには、漢字の部首、すなわち、へん・つくり・かんむりなどを、まちがいなく見分けることと、画数を正確に数えることが大切です。漢和辞典のひき方には、部首からひくのと、画数からひくのと二つの方法があります。

ふつうの漢和辞典は、漢字を部首別にして、各部首の中が、さらに画数の順にならべてあります。辞書で漢字をひくには、まず、それがどの部首にぞくするかを知り、次に、他の部分の画数を数えま

す。

たとえば、「植物」という語の読み方や、意味がわからないとします。「植」は「木へん」です。「木へん」をのぞいた他の部分の画数は、八画です。したがって、「木部」の八画のところを見れば、「植」の字が出ています。そして、「植物」は、じゅく語のところに出ています。

漢字によっては、部首のわかりにくいものがあります。その場合は、「総画索引(さくいん)」「または」「音訓(くん)索引」のようになっています。

総画数とは、部首をふくめた画数のことです。漢和辞典の中には、部首別でなく、総画数によったり、音訓によったりして、漢字をならべられているものもあります。

国語辞典は、漢和辞典とちがって、ことばがみな五十音順にならべてあります。国語辞典を使うには、五十音の順序をおぼえておくことが大切です。だく音の「が」や、半だく音の「ば」は、それぞれ清音「か」「は」の次にあります。よう音の「きゃ」「は」「きや」「の次にあります。そく音の「っ」「は」「っ」の次にあります。

(新漢字 画 確 序)

(059. jdas)

辞書には、この外に、百科事典などもあります。百科事典は、ことばの意味だけでなく、ことがらをくわしく説明してあります。

ことばのならば方は、国語辞典と同じになっています。

辞書のひき方をよく覚えて、早く、自由に、使えるようになりましょう。

次のことばを、辞書でひいて調べましょう。

記録      ローマ字      あらためる

南極      曲線      おとろえる

高級      まぎれる      食塩

スライド      なぎやか      合唱





## 交通の話

### 一 交通機関の進歩

世界の文明が進むにつれて、物を遠くまで速く大量に運び、さかんに人が往来する必要が生じます。そこで、人は、交通に便利な機械を次々に発明してきたのです。

大むかしの人は、陸上を歩いて往来し、品物は、頭やかたに乗せて運ぶことしか知りませんでした。そのうちに、動物をかいならしめて乗ったり、品物を負わせたりするようになりました。後になって、手おし車を発明しましたが、荷車を動物に引かせるようになったのは、やっと十六世紀の末からです。

水上の交通には、初めに、いかだ、次にまる木船、それからはん（新漢字 録 極 塩 機 運 負

(Ogō. jpas)

船が使われるようになりました。はん船は、次第に大きなものになり、遠い外国との交通もできるようになりました。十五世紀の終わ

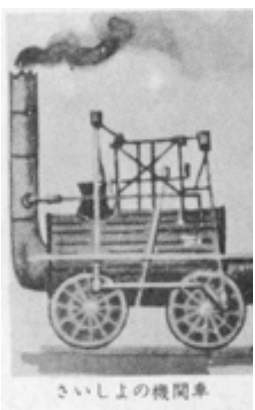
りから、大航海が始まりました。

コロンブスは、アメリカ新大陸を、バスコッドーガマはインドへの航路を発見し、マゼランが初めて世界を一周しました。

交通機関は、じょう気汽かんを使うようになってから、いちじるしく発達しました。じょう気力の力で物を動かすことは、かなり早くから知られていました。でも、力の強いじょう気汽かんは、一千七百六十七年、イギリスのジェームス・ワットが発明しました。このじょう気汽かんを車に取り付けたのが、汽車のはじまりですが、交通機関として、すばらしい力を持つ機関車を発明したのは、イギリスのジョージ・スチブソンで、それは一千八百二十五年でした。

じょう気汽かんを船に取り付けたのが汽船

で、アメリカのフルトンが、一千八百二年に発明しました。



さいしよの機関車

人間は、大むかしから火を利用することを

知り、その力を最も強く使うじょう気汽かんを作りましたが、それ

だけでは、満足しませんでした。人間は、新しい「第二の火」を求めて、ついにそれを手に入れました。

「第二の火」とは、「電気」のことです。人間は、一千五百年ほどむかしに、物と物をすり合わせると電気が起こり、物をすい付ける力が生じることを発見していました。人間のちえがだんだん進んで電気を使い、汽車・電車・自動車などを走らせるようになりました。自動車には、初め、じょう気汽かんが使われ、次に、電気が使わ

(新漢字 満足)

(061. j p a s s )



1930年がたフォード

れました。ガソリンエンジンの自動車が、世界に広まるようになったのは、アメリカの、ヘンリー・フォードが、じょうぶで使いやすい自動車を作り出してからです。

鳥のように、空を飛んでみたいと思っていた

人間が、初めて、空中を飛んだのは、一千七百八十年ごろでした。フランスのモンゴルフィエ

兄弟が、紙で大きな気球を作り、それにつるしたかごに乗って空を飛んだといわれています。そのころから、空中飛行の研究は、いよいよさかんになり、各国の人々が、さまざまの実験をしました。フランスのルナール、オーストリアのシュワルツ、フランスのアーデル、ドイツのリリエンタールなど、みなむ中になって飛行機を作り、空を飛ばうとしました。そして、エンジンを取り付けた飛行機が、人間を乗せて初めて空中を飛んだのは、一千九百二年でした。それは、アメリカのライト兄弟の発明した飛行機です。五十三メートルを十二秒で飛ぶことに成功しました。

ブラジル人、サントス・ズモンも、ライト兄弟と

同じ時代に、フランスで飛行機を発明しました。かれは、初め飛行船を作り、一千九百一年に、パリのエッフェルとうの上を飛びました。続いて一千九百六年に、飛行機を作りました。

パリこう外で、試けん飛行に成功しました。

こうして、大空を自由に飛び回るとい

### (新漢字 秒)

(062. jpas)

長い間の人間の望みがかなえられ、飛行機は、めざましい発達をしてきました。わずか五十年ほどの間に、世界中の空を飛び回るようになり、交通機関の花形といわれるようになりました。今では、ガソリンエンジン、ジェットエンジンになり、ロケット時代になろうとしています。

人間は、第一の火、第二の火を利用して、文明を進めてきましたが、まだまだ満足しませんでした。次には、「第二の火」を求めていきましたが、これもついに手に入れました。

「第二の火」というのは、「原子力」です。



ライト兄弟発明の飛行機

一千九百五年に、ドイツのアインシュタインが、原子からすばらしい力を作り出すことができると言いました。果たして、一千九百四十二年、イタリア人エンリコ・フェルミが、アメリカで原子炉を作り、ウランニウムから原子力を取り出しました。

やがて原子力は、原子力自動車・原子力機関車・原子力船・原子力飛行機などに使われるようになるでしょう。

原子力ロケットが完成すれば、月の世界へ旅行することもできるでしょう。

こうして、交通は、原子力の時代をむかえ、世界の文明は、ますます進歩していきます。

(新漢字 果)

## 二 ブラジルの交通

陸上の交通が、急に発達したのは、汽車が発明されてからです。

世界の国々は、競争するよう  
に鉄道をしき、汽車を走らせま  
した。

ブラジルも、帝政時代に交通機関として、汽車を取り入れました。  
一千八百五十四年、初めて、ペトロポリス鉄道が開通しました。

これは、後にマウアー子しゃくといわれたイリネウ・エバンジェリ  
スタ・エ・ソウザの力によるものです。次いで、セントラル鉄道の  
工事が始められ、リオ・デ・ジヤネイロとサン・パウロの間に鉄道  
がしかれました。その後、内陸地方に鉄道がしかれ、今日、ブラジ  
ルの鉄道全長は、三万七千キロをこえています。

鉄道の無い地方では、馬車・牛車・自動車が使われています。

また、船もさかんに使われています。

たとえば、アマゾン地方など、となりの家へ行くにも船を使います。

近年は、りっぱな道路が各地方に開かれて、自動車の利用は、日を追ってさかんになってきました。

特に、サンパウロとサントス間の、アンシエッタかい道、サンパウロとリ

(064. jdas)

オールドジャネイロ間のズットラかい道などは、よく整った自動車道路として、世界にほころぶことができます。

飛行機が、ブラジルの空を飛ぶようになったのは、一千九百二十年ごろからでした。一千九百二十七年に、民間の航空会社ができて

ポルトアレグレとリオグランデの間

に、初めて航空路が設けられました。



その後、世界各国の飛行機も、ブラジルの空を往来するようになりました。

こうして、国内はもとより、外国との交通は、飛行機によって、ますます便利になってきました。

ルイスIIガマ

「ねえ、ルイスや。おとうさんと

船を見に行かないか。」

「えっ、お船。」

「うん、大きな船だよ。」

「ぼく、見たい。連れてって。」

「じゃあ、服を着かえておいで。」

ルイスは、大喜びで母のところへとんでいった。

「ぼく、お船見に行くんだ。おとうさんよ。」

「おや、そうかい。よかったね。お船で、いたずらしたらだめよ。」  
(新漢字 整 設)

(065. jpaes)

よく気をつけてね。」

「だいじょうぶだよ。」

母のルイザは、にこにこしながら、おさないルイスの顔や手を、あらってやり、取って置き服を出して着せてやった。

「行ってまいります。」

戸口に立って見送る母に、ルイスは手をふり、喜びいさんで出かけていった。

父と子はボートに乗って、サライバ号にこぎつけた。初めて見る二本マストの大きな船。ルイスにとっては、何もかもめずらしいものばかり。目をかがやかせ、む中になって船の中を見て回った。

ルイスは、ふと気がついた。父のすがたが見えない。おどろいて船の中をかけ回ってさがした。父はどこにもいない。ルイスは、ま

つさおになって、かん板にかけ上がった。見ると、さつきルイスたちが乗ってきた

ボートが、はとばの方へ帰って行く。

そのボートに父がいるではないか。

「おとうさん。おとうさん。」

ルイスはなきながら父をよんだ。

しかし、父はふり向きもしない。

なきさけぶルイスを残して、ボートは、次第に遠ざかっていく。

「おとうさん。」

ルイスは、船の手すりに取りすがって、わっとなきぐずれた。

かん板をふき過ぎる風が、なみだにぬれたルイスのほおを、やさしくなてていくばかりだった。

(066. j. p. 88)

「ぼくを、ぼくを売ったんだね。おとうさんは——。」

ルイスはこのとき、船においてきぼりにされたわけを知った。

『野に開く、まつむしそうのようによさしく、四月の日ざしを受

けてさくボニーナそうのようにあたたかな………。』

母の手をはなれたルイス。おそろしい人買い船に売られて、あわれなどれいにされたのは、ルイスが十才のときだった。

ルイスⅡゴンザガⅡピントⅡダⅡガマは、一千八百二十年、バイアに生まれた。

母ルイザⅡマインは、アフリカ生まれ

の黒人で、父はポルトガルの身分の高い人だった。

母ルイザは、美しく、やさしく明るい

人であったが、火のような、はげしい心を持っていた。初めは、どれいとしてブラジルに来たが、後、自由の身となった。元気な働き者で、バイアの町で野菜屋をしていた。

ルイスの父は、心のやさしい人だったが、だんだん気があらくなり、後には、かけごとをしたり、人をだましたりして、ただお金のことしか考えない人になってしまった。

ルイスを乗せた船は、リオージェジャネイロに着いた。ここでルイスは、どれいの売買をする、ビエイラという人の家に連れていかれた。ビエイラの妻やむすめは、おさないルイスが、目になみだをためて、母の名ばかりよぶのを見て、あわれに思った。ルイスの手足をあらってやり、女どれいに世話をさせた。

(新漢字 売 買 妻)

(067. r d 34)

だが、このやさしい人たちの中にいるのもわずかの間で、どれいのルイスは、また売られていかねばならなかった。やがてルイスは、ペレイラというどれい商人に買われた。

ペレイラは、ルイスを多くのどれいといっしよに、サンパウロに売りに行った。サンパウロからサントスへ、そしてカンピーナスへ。おさないルイスにとって、歩き続けの旅はつらかった。はだしの足は、血まみれになり、夜はそのいたみで、ねむることさえできなかつた。

そのころ、バイア生まれのどれいは、きらわれていて、ねだんがたいそう安かった。ルイスは、バイア生まれで、おまけに子どもである。だれひとりとして、貰おうとしなかった。たまには「うちの子どもたちを買ってやろうか。」と立ち止まる人があった。

「生まれはどいかな。」

「バイアです。」

「なに、バイア。ちえつ、バイア生まれは、ただでもいらん。」

やっと、買い手がついたと思っても、した打ちをして行ってしまうのだった。

ペレイラは、売れないルイスに見切りをつけ、自分の家の雑用をさせることにした。こうしてルイスは、ペレイラの家で、さびしくつらい日々を過ごしていった。

ルイスが十七才のときだった。ペレイラの家には、アントニオ・プラード・ジュニオールという、法律を勉強している学生が来た。かれは、どれいのルイスに親切だった。ふたりは兄弟のようにながが

(068. jpg )

よくなった。アントニオから、初めて文字を教えてもらったルイスは、かわいたすな地が水をすうように、学問を身につけていった。一年もたつと、読み書きや計算が正確にできるようになった。

ルイスは、十八才のとき、ペレイラの家を出て軍隊にはいり、後に方々のけい察で働いた。サンパウロけい察の書記になったこともあった。

ルイスがおさないころ、母は、たびたび、アフリカから売られてくるどれいの話をした。ルイスは、目になみだをためてその話に聞き入った。そして、あわれな、気の毒などれいを、一日も早く救わなければならないと思うのだった。

その思いは、かれがどれいとなって過し、軍隊でくらすうちにますます強くかたいものになっていった。そして、ついに、かれは火のようなはげしい心で、どれいを解放する運動に飛びこんでいっ

た。そのため、けい察の書記もやめさせられ、ルイスの生活は苦しくなった。しかし、かれの働きは、いっそうめざましくなっていた。

人々の良心をよびよるまじうとして、詩を書いた。どれいたちは、かれの詩によってなぐさめられ、はげまされた。また、どれいをいじている者は、むねをさかれるような思いをした。

ルイスは、べんご士となって、罪も無いのにとらえられているどれいをかばった。

道を行く人々に向かって、人間の平等と、どれいの解放をさげんだ。

ルイスIIガマのさげびは、どれいをくさりでつなぎ、こき使って

## (新漢字 算解放良)

(069. jpg)

いる人々を、強くするどくむら打った。



こうしたはげしい運動を続けていても、わすれられないのは母の



ことであつた。あの人買い船に売られた日、何も知らないで、顔をあらつてくれたり、服を着かえさせてくれた母。あの日、別れたきり

のやさしい母。ルイスは、バイアの母に何度も手紙を出したが、返事は来なかつた。うわさに聞けば、母もまた、どれいの解放をさげんで、バイアを追われ、リオージェジャネイロにいるというのであつた。

ルイスは、十五年の間に何度も、母をたずねて、リオージェジャネイロに行ったが、ついに会えなかつた。ようやくわかつたのは、ずっと以前に、母は役人にとらえられ、遠い外国へ追放されたということであつた。

ルイスは、生死もわからない母を思い、むかし、軍隊でくらしていたとき見たゆめを思い出した。

ふと目の前に、なつかしい母の顔があらわれた。

「あつ、おかあさん。」と、思うと、すつと消えた。うつらうつらとしたとき、また目の前に母の顔が……。……。しかも、何人かの兵

隊に引き立てられ、足ばやに通り過ぎていく母のすがた。

「ルイスや……………」

はつきりと自分の名をよぶ母の声に、ルイスはとび起きた。急いでまどをあけて外を見回した。しかし、そこにはだれもない。何も無い。

真夜中の静けさの中に、長く、冷たく、道がただひとすじ、目の前に横たわっているばかりだった。

(追 真 横)

先生 と 父母 へ

この教科書は、日本語（6）で広がった生活面をさらに社会科面（地理・歴史）に、広げました。国土や文化などについての理解 と愛情を育て、話題を豊かにし、正確に読むとともに読む速さを増し、読みの物の範囲を広げるようにしていくことを目的としています。

わからない文字や語句の読み方や意味を自分で調べる予習復習の習慣をつけさせ、自然や人生に対して正しい理解を持たせ、道徳性を高め、教養を身につけるのに役止せるよう希望して編集しました。

地名・人名 歴史的なことばの中に、教育漢字以外の漢字がありますが、これには、なるべく漢字かなのだき合わせ表記をさけ、ふりがなをつけて一般に使用されている形をとり上げました。これは、読みにくさの障害を除くために取ったのです。書く学習をのぞんではいけません。また、敬語の正しい使い方を教え、正しく話す力をつけるために敬語の文を入れました。

題材の選定 児童の視野を社会生活のいろいろな面へ開かせ、それを発展させ、たとえ児童が、直接、経験しないものでも、読みを通して、間接経験によ

りその経験領域を拡充していくように計画しました。「ブラジリア」「日本の国」「ブラジルへの移住」「おそろしいへび」「交通」の五つと作詩指導のための「詩」を設定し、その間に言語指導のための文を設けました。

## 内容について

4～9 詩 定型詩の「朝だ元気で」と、自由詩の「木の根」とを読ませ、詩特有の文章表現を理解させ、詩の鑑賞の初歩を指導する。さらに詩を作ろうで、詩作の意欲を起こさせ、詩作の態度を養い、詩を作らせ、発表させる。めいめいの作詩を持ち寄り、鑑賞し合うこともやらせたい。【注】詩作については、気軽に喜んで作るよう指導したい。

10～12 「手」ということば 手ということばの、いろいろな使い方方を教え、ことばのおもしろさを知らせ、他のことばについても研究させる。【注】児童にわかりにくい用例については、さらに説明を加えて、理解させてほしい。

13～20 ブラジリア 1 新しい首都は、はるえさんのブラジリア見学記で、その読み方になれさせ、見学記を書く能力を養う。合わせて、新首都ブラジリアへの関心を高め、理解を深める。2 新首都が造られるまでは、ブラジリアをこ建設するまでの過程を説明したものである。ブラジル語及び外来語が多いことは、この課の特長である。指導者の適切な補足指導を希望する。

プラノIIピロット・スポーツIIセンターなど。

21〜36 日本の国 この章は、日本を地理的・歴史的にながめ、日本を理解させるために設けたものである。

1 位置と地形では 地図を見ながら学習させ、位置・地形など地理的な理解を深めさせる。【注】さらに詳しい地図や、写真絵葉書などを用意し、説明指導を加えてほしい。2 日本の奴風景 この課では、日本の国立公園のうち7か所だけを取り上げ、写真を入れて説明したものである。【注】これも、写真絵葉書などを用意し、補足指導をしてほしい。3 日本の国 ここでは歴史的にみた日本を理解させるため、簡単に説明したものである。したがって、むずかしい語句が多く、理解に困難な点もあると予想されるが、適切な説明を加えてほしい。

4 福沢諭吉 近代日本の育成に功積のあつた福沢諭吉の伝記である。諭吉の思想と信念を児童につかませるのがこの課

(073. jpg 左pgのみ、横書き。【】○囲いあり)

のねらいである。さらに進んで日本の偉人の伝記に興味を持たせ、読書欲を養成させたい。

37〜40 方言と共通語 方言と共通語とを対比させ、共通語の必要を知らせる。方言と共通語に対する言語感覚、共通語使用の能力を身につけさせ、また、こ

とばの学習への正しい態度を養う。方言を集めて研究させるのも望ましい。

41〜58 ブラジルの移住 日本からブラジルへ、そして移住地へと、日系コロニアのたどった道、さらにブラジル開発につくした人々について簡単に知らせる。

1 赤道祭では、日本からブラジルへ移住の際の船内生活の大体を知らせ、合わせて、船内生活を読みとり、船に関することばを理解させる。表現のおもしろさから昔の情景を想像させる。2 新しい生活では、移住後間もない友子さん一家の、新しい土地での生活を読みとらせ、新生活への態度を理解させる。3 日系コロニアでは現在に至るまでの日系コロニアの発展経過を読みとらせ、功労のあつた人々の名を知らせる。4

水野 龍と 5 中村長八は、伝記体である。この文を通し、二人の生活態度や、考え方を理解させ、コロニアのためにつくした人々に敬意を注がせる。

59〜72 ひたいのきず 劇活動は、児童のたいへん好むものであり、情操を高め、ことばの能力をつけるのに意義あるものである。日本語（6）の森のともだちより高度のものが取りあげてある。脚本の形式になれさせ、中心テーマ、中心場面について研究させる。各登場人物の性格をのみこませ、感情をよく表わした会話の練習。グループごとの本読み。公演についての相談と用意。公演。練習のたびに反省会を開き、指導者と児童との協力により、成功させたい。

73〜82

おそろしいへび この章では、両生類、

は虫類についての一般知識とブラジルにすむ毒へびについて教え、へびの血清薬を發明したビタル・ブラジルの伝記を通して、彼の功績を知らせる。1 冬眠する動物では、理科用語と、理科的な知識を得させ、両生類、は虫類について興味と関心をもたせるとともに研究態度を育てる。2 おそろしい毒へびでは、ブラジルの毒へびについての知識と注意を与える。3 ビタル・ブラジルは、彼の伝記で、その人となりと功績を読みとらせ、科学者に親しみを持たせる。この章は理科的なものなので、横書きにした。

横書きの文章を読んだり書いたりする能力を養いたい。83〜87 敬語 ここで初めて敬語をまとめて取り上げた。敬語の正しい使い方を理解させ日常使用することばについて反省させる。いろいろな場合の敬語の使い方について具体的に練習させる。

88〜97 銀の食器 ジャン・バルジャン物語、長編物語を読んで、それを味わう力を養い、読後の感想文を書かせる。段落を切つて文意をつかむ方法を教え、何回も読ませて、主人公の心持ちを味わわせる。紙芝居・演劇などにして発表させるのも効果的である。広く世界の物語に興味を持たせ、読書欲を高める。

98〜106 秋山君の二るい打 団体行動においては、特に規律が第一であることを読解させる。野球と野球用語を教え、スポーツに興味を持たせ、明るい性格を養いたい。107〜110 オリンピック大会 世界的スポーツ大会であるオリンピック大会について、その起原や主旨、会場・種目と五輪のマークについて説明したもので、オリンピッ

クについての知識を与え、運動競技への、関心を高める。  
1111114 辞書のひき方 辞書にはいろいろなものがある  
ことと、その具体的なひき方を読解させ、辞書の使用法を理解さ  
せる。これによって自学自習の態度を身につけさせたい。【注】い  
ろいろな辞書を見せ、実際に使用させ、練習させる。

1151124 交通の話 今日、我々の生活に最も大切なもの  
は、交通機関であり、児童も興味を持つものである。ここでは交  
通機関とその発明者及び発達についての簡単な知識を読みとら  
せ、科学についての関心を高め、知識的な読み物になれさせ、さ  
らに交通機関や科学者についての研究の糸口をつけてやりたい。  
1251135 ルイスIIガマ まず文字や語句の指導によっ  
て、その抵抗を排除し、長文を一気に読み通す能力とともに、文  
学的表現の文を正確に深く読みとる能力を養う。

読んだあと、自分の意見や、感想をまとめさせ、進んでこ  
の種の長編を読む態度を育てる。読後の感想発表を行なうことも  
望ましい。

(072. jpg 右pg下段のみ)

今までに習ったかん字

(1) 一二三四五六七八九十日小木下川大上月子手足中牛人  
(2) 石方出水赤青土口夕走目耳左右女光外見声力  
本火白立金犬入山



(3) 行田先生年学校音合雨天氣車步半分平回前字  
空広花汽長夏冬高糸休貝早虫少知

林元風作台夜組村会馬品町黒色千何百国名書  
形竹每思引古玉毛切友男地神今太

秋南野北森自正

(4) 来久話言当凶画用紙度返事家草葉安心向朝持  
西多去聞時近東京場海所文誦次記

間黄池王島根同血止道考屋絵店米壳買取明戸  
仕原樂門全工美使春刀雲

(5) 教室新始番徒数相談角順君官顔重物動具板植  
注意員曜午後終受昼集者歌助星寒

々乗波遠族進住命畑以守通勉強部祭運役急式  
客谷晴才世弱死両追礼着食皮病配

語号指材料点母界父魚都州公園市体育研究民  
苦感雪鳥表旅

(6) 庭飛遊拾付落鳴戦負初勝味旗念祝緑円連定曲  
機球面茶陸湖線鐵路交統央岸比温

万船隊航発喜変起開送移残帰独最代共和第問  
卒業頭働愛打弟妹活軍実恩流首種

関係置細農焼由肉柱建銅深他布医清短坂投習  
別岩調筆府駅区局社商寺有浴博館

類港暑様身似利毒折便底綿転写理科化成益害  
答悪菜果親橋器特待服席電橙消暗

速兄説決荷等衣主芽

(074. jpg 上段 下段あり)

(上段)

元文部省図書監修官

監 修 林 実 元

(在東京)

編集執筆 (ABC順)

古野 菊生

二木 秀人

加藤 千重子

岡崎 親

坂田 忠夫

武本 由 夫

表紙・挿絵 (ABC順)

玉木 勇治

星      ルリ子

(下段)

日 本 語 (7)

一九六一年七月二十日 印刷

一九六一年七月二十五日 発行

一九六四年三月二十日 再版

定価

著 者 日 伯 文 化 普 及 会

日本語教科書刊行委員会

発 行 者 日 伯 文 化 普 及 会

ブラジル、サン・パウロ市

サン・ジヨアキン街二八一

東京都千代田区神田神保町三ノ二九

印 刷 者 株 式 会 社 帝 国 書 院

代表者 守屋紀美雄

発 行 所 日 伯 文 化 普 及 会

ブラジル、サン・パウロ市

サン・ジヨアキン街二八一